

# コンスタンティノーブルのストゥディオス修道院

## ——歴史と史料——

都 甲 裕 文

### はじめに

現在、イスタンブルのイムラホル=イリアス=ベイ通り付近にあるイムラホル=ジャーミは、ビザンツ帝国時代に首都コンスタンティノーブルの南西隅の黄金門付近にあったストゥディオス修道院の遺構である。この修道院の正式な名称は、ストゥディオスの先触れ人修道院であり、ストゥディオスが創設者の名前を、先触れ人が記念された聖人、洗礼者ヨハネを示している。ストゥディオス修道院は、5世紀半ばに洗礼者ヨハネを祀る聖堂が建設され、直後に修道院となったイスタンブルに現存する最古の修道院建築遺構というだけでなく、9世紀前半の第2次イコン破壊運動に激しく抵抗した修道院長セオドロスを筆頭にその修道士たちが約千年に及ぶその歴史の中で多くの史料を残した点で歴史研究にとって重要である。しかしながら、現在のところ、ストゥディオス修道院に関する包括的な研究は存在せず、その史料に関する解題もかなり古くなってしまっている<sup>(1)</sup>。そのため、本稿では、ストゥディオス修道院研究のために、現在利用可能な史料の紹介を行う。むろん、筆者の知見には限界があり、その興味によって偏りのあることも認めざるを得ないが、本格的な研究の取り組みの第一歩となることを目標とする。

### I. 修道院の創設

ストゥディオス修道院の創設文書が現存していないため、その創設の経緯と時期に関して明

確な説明をすることは難しい。創設に関して言及するいくつかの文献史料の中で最も有名な『証聖者セオファニス年代記』では<sup>(2)</sup>、創世暦5955年すなわち西暦462年9月から463年10月の間にストゥディオスによる聖堂(ναός)建設と修道士の定住が報告されている。しかし、8世紀後半から9世紀初めの聖人セオファニスの名前に帰されているこの年代記は、必ずしも彼単独の著書ではなく、特に年代に関しては正確さを欠いている。該当の箇所も西のローマ皇帝リビウス=セウエルスの即位年となっているが、実際の即位は461年であった。本書を英訳したC. マンゴ(Mango)は、この部分で『証聖者セオファニス年代記』の著者が利用した文献が518年以降に読師セオドロスによって執筆された『教会史』であると指摘した<sup>(3)</sup>。セオドロスの記事では、コンスタンティノーブル総主教イェンナディオスの在職中(458-471年)の出来事としており、その次に聖ダニエルの柱上り(460年)の記事が続いているので<sup>(4)</sup>、修道院創設は458年から460年の間に位置する。しかし、880年から900年頃コンスタンティノーブルの碑文から写し取られた『ギリシア詞華集』第1巻第4節ではストゥディオスが聖堂建設の恩賞として「コンスルの東樺(ὑπατίσιος ῥάβδος)」を与えられたとされている<sup>(5)</sup>。この詩がいつ書かれたかは、不明だがストゥディオスという人物が454年には東のコンスルに就任していたことが6世紀の二つの年代記『復活祭年代記』と『伯マルケリヌス年代記』によって示されているので<sup>(6)</sup>、聖堂建設は少なくとも454年以前になる。

この二つの年代記は、前年453年の項にシリアの都市エメサ（現ヒムス／ホムス）での洗礼者ヨハネの頭部発見を伝えている<sup>(7)</sup>。この知らせがストゥディオスによる洗礼者ヨハネの聖堂建立の契機となった可能性がある。この453年は、ビザンツでよく使用された15年周期の暦インデクティオン (ivδικτιών) の6年に当たるが、ストゥディオス修道院遺構の調査を行ったドイツのU. ペシュロフ (Peschlow) によれば、モルタル土台の中に大量の煉瓦が発見され、その煉瓦には製作年と見られるインデクティオン3年、4年、5年の刻印が押されていた<sup>(8)</sup>。彼は、これを450年から452年に該当するのではないかと判断している。

10世紀後半に編まれた一種の百科全書『スダ (Σοῦδα)』のストゥディオス (人名) の項の傍注には、その建物が初めは公会堂に属していたが、後に修道院になったと記されている<sup>(9)</sup>。洗礼者ヨハネの聖遺物を所有していたかどうかは、明白ではないが、ストゥディオスは、自分が建設した聖堂の権利を放棄した功績でコンスルになったが、後に何らかの理由で彼に聖堂が返され、修道院に転用された。したがって、実際の修道院として出発は、彼のコンスル在職 (454年) 以後であった。この際、ストゥディオスは、「眠らない人々 (ἀκοιμήτοι)」を修道士として聖堂に定住させた<sup>(10)</sup>。彼らは、当時ヴォスポロス海峡のアジア側のイリネオン (現チュブクル) にあったアキミティの修道院から招かれた<sup>(11)</sup>。この修道院は、初め5世紀前半にコンスタンティノーブルに元帝国官吏のアレクサンドロスが任地のシリアから首都に戻った後、自ら院長となり創設された。アレクサンドロスの方針で一日中、昼も夜も奉仕の詠唱を絶やさなかったことから、この共同体は、「眠らない人々」と呼ばれたが、おそらく修道院異端のメサリアノス派との非難を浴び首都を追われた。しかし、イリネオンで5世紀半ばに院長になったマルケロスの下には各地から多数の修道士が集まっていたので、その一部がストゥディオス

の新たな共同体に移籍した。この後、ストゥディオス修道院でも「眠らない人々」の奉仕が行われたと考えられる。

## II. 院長セオドロスの時代

799年頃院長となったセオドロスは、ストゥディオス修道士の中で最も有名なのだが、彼に関する近年の研究は、意外にも多くない。それは、新しい史料校訂や現代語訳の少なさに比例していると思われる。教会法との関連史料に限定されるため、聖人文学関係のものは除かれているが、T. T. マルティニユク (Martynyuk) の文献案内から、最近の研究動向をつかむことができる<sup>(12)</sup>。セオドロスに関する比較的新しい研究を数点あげると<sup>(13)</sup>、R. チョリ (Cholij) の著作は、修道院改革やイコン破壊運動反対がセオドロスの東方キリスト教の伝統に沿った彼の信仰に発していることを系譜的に裏付けている。T. プラッチ (Pratsch) の著作は、プロソポグラフィ研究 (人物像研究あるいは人物情報学) によってセオドロスの一族や修道士との関係から彼の行動を分析している。まだ名字が使用されていない中期ビザンツ期では、やや飛躍した結論が多いように感じられる<sup>(14)</sup>。P. J. ハトリ (Hatlie) の博士論文は、セオドロスが多数残した書簡を十分に利用した本格的な研究と見られるが、論文が非公開なのが残念である。

セオドロスの書簡は、最も重要な史料の一つであることは間違いない<sup>(15)</sup>。彼は、皇帝コンスタンティノス6世 (在位780-797年) の離婚に関する2度の「姦通論争」での追放期間 (797年と809-811年) と皇帝レオン5世 (在位813-820年) のイコン破壊運動再開後の追放期間 (815-826年) にも多くの書簡を発信していた<sup>(16)</sup>。宛名には、母親のセオクティステイヤ伯父で霊父のプラトンを始め、修道士や修道女、聖俗の高位高職を有する人、女帝のイリニ (在位797-802年)、皇帝のニキフォロス1世 (在位802-811年)、コンスタンティノーブル総主教のニキフォロス1世 (在位806-815年)、ロー

マ教皇のレオ3世（在位795–816年）やパスカリス1世（在位817–824年）の名前が記され、さらに教会会議宛のものも存在した。現在ではG. ファトゥロス（Fatouros）が校訂した564通の書簡（内4通は本文なく実質560通）が利用可能である<sup>(17)</sup>。

セオドロスの名を世に知らしめたのは、イコン破壊運動に対する徹底的な抵抗の姿勢であった。K. I. ザルコス（Δαλκός）が現代ギリシア語対訳を付したセオドロスの『イコン破壊論者駁論』3編は、J.-P. ミーニュ（Migne）の『教父著作大全』に収録されたシルモン版を再編集したものである<sup>(18)</sup>。なおこれらには英訳と第1駁論のみ日本語訳がある<sup>(19)</sup>。

しかし、セオドロスがヴィシニア地方の家族修道院サクディオオンから伯父のプラトンとともに院長としてストゥディオス修道院に移籍した後<sup>(20)</sup>、最も心血を注いだのは、修道制の「改革」であった。当時のストゥディオス修道院は、「眠らない人々」の流れを汲む「先住者（αὐτοχθόνες）」の神秘主義的傾向が色濃い共同体であった<sup>(21)</sup>。セオドロスは、古代修道院の厳格な共住制への復帰をめざした。そのため彼は、多数の修道教育講話を作成した。そのように重要な史料であるにもかかわらず、セオドロスの修道講話は、必ずしも利用しやすいとは言いがたい。まず『修道小講話』は、現在でも1891年に出版されたオヴレ版が最良のテキストであり、134編の講話を収録している<sup>(22)</sup>。近年、オヴレ版を底本としたフランス語とイタリア語の翻訳版が刊行された<sup>(23)</sup>。

セオドロスの『修道大講話』に関しては、事情がやや複雑になる。写本の系統により、3つに分けられ、第1巻には87編、第2巻には128編、第3巻には少なくとも40編が含まれている<sup>(24)</sup>。しかし、第1巻の大講話の87編の内、ギリシア語テキストが刊行されているのは、フランス国立図書館所蔵の12世紀のパリ=ギリシア語写本891に基づくコッツァール=ルージュ版全111編の中の38編にすぎない<sup>(25)</sup>。残りの49編は、未刊行の状

態である。しかし、第1巻の完全写本である10世紀末から11世紀初めのパトモス写本111などを基にJ. ルロワ（Leroy）が校訂した未刊行版から、近年フランス語訳が出版された<sup>(26)</sup>。

『修道大講話』第2巻の最良のテキストは、パパドプロス=ケラメフス版である<sup>(27)</sup>。128編ある第2巻の内、やはりパトモス写本111から124編を収録している。残りの1編の断片と3編の番号のみがボドレー図書館所蔵の12世紀のパロッジ写本130にのみ伝わっている。また、コッツァール=ルージュ版にもパパドプロス=ケラメフス版と重複する第2巻の40編が収録されている。しかしその内、第2巻第30話（パパドプロス=ケラメフス版第26話）は、第1巻第77話と同一のため、第2巻独自のテキストは39編となる。第3巻に属す講話の数は、不明確である。コッツァール=ルージュ版には、第1、2巻の講話以外の34編が順序不同で収録されている。しかしその内の第26番は、『小講話』第100話と同一であり、また『大講話』第1、2、3巻にも『小講話』にも分類できない「講話外典（Extravagantes）」9編の内、8編が含まれている。結局、コッツァール=ルージュ版で第3巻に属すと考えられる講話は、25編のみである。

アソス山のパンデレイモン修道院所蔵のパトモス写本111および112から翻訳されたものを含むロシア語版『大講話』がセオドロスの著作集に収録されている<sup>(28)</sup>。ただし、第3巻第46話のみ同修道院所蔵の17世紀の写本565から翻訳されている。これには、『修道大講話』第1巻87編、第2巻124編、第3巻46編が所収されている。フランス語版と同様にそこから第1巻のギリシア語テキストのない49編の内容を知ることができる。またロシア語版の第3巻の中には外典も含まれており、コッツァール=ルージュ版の33編と重複している。その内訳は、外典7編と第3巻26編で、後者の内、コッツァール=ルージュ版第16話と重なるロシア語版第3巻第9話は第1巻第42話と同一である。結局、第3巻独自のギリシア語テキストは25編となる。ロシア語版には他の

ギリシア語校訂版とフランス語翻訳版からは知り得ない13編の講話が存在しているが、使用には注意が必要である。

セオドロスの「改革」の集大成として作成されたのが、彼の死（826年）の直前に書かれたと見られる『遺言書』であった。近年、ミーニュの『教父著作大全』に収録されたシルモン版からの英訳が出版されたが、その後、O. ドゥルイ（Delouis）による新たな校訂版がフランス語の対訳を伴って出版された<sup>(29)</sup>。この史料は、次に紹介する『規則』とともに「ティピコン（τυπικόν）」と呼ばれる修道院文書に属しており、通常、創設者の伝記などによって創設の意図が示されるが<sup>(30)</sup>、いわば「第2の創設」を行ったセオドロスの事業継続をストゥディオス修道士に託す内容になっている。ティピコンのもう一つの文書『規則』は、おそらくセオドロスの死後に作成された。2つの校訂版が存在する<sup>(31)</sup>。さらに、第1部職務違反110項目と第2部奉仕違反65項目を含む『罰則』の校訂版がミーニュの『教父著作大全』に収録されているが<sup>(32)</sup>、セオドロスの時代に帰することができるのは、第1部だけであると見られている。セオドロスの名前を冠した罰則集が多く存在したが、近年、校訂版が出されたものは、第1部とほぼ重複している<sup>(33)</sup>。

「ヤンヴォス（ιαμβος）」と呼ばれる短い形式のセオドロスの詩が多数残されている。この史料からも、やはり彼の「改革」への取り組みを知ることが可能である。最新のP. シュベック（Speck）による校訂版124編にはドイツ語訳が添えられている<sup>(34)</sup>。

伯父で共に院長を務めたプラトンに対する追悼頌辞は、セオドロスの家族関係を知る上で、重要である<sup>(35)</sup>。同様のことがサクディオス修道院で共に修道生活を始めたセオドロスの母セオクティスティにも言えるが、彼女の追悼頌辞には、最近、2つの新しい校訂版がそれぞれイタリア語と英語の翻訳とともに出版された<sup>(36)</sup>。セオドロスとほぼ同時代を生きた証聖者セオ

ファニスに対する頌辞も新しい校訂版とフランス語訳が出された<sup>(37)</sup>。

セオドロスの活動を描いた主な聖人伝は、4つあり、それぞれ慣用的に『セオドロス伝A, B, C, D』と呼ばれている<sup>(38)</sup>。従来、それらの中で唯一著者がはっきりしており、その他の聖人伝が依拠していると見られる『セオドロス伝B』は、855年以降にストゥディオス修道院の修道士ミハイルが書いたオリジナル作品であると考えられてきた<sup>(39)</sup>。しかし近年、D. クラウスミュラー（Krausmüller）の文献学的研究によって『セオドロス伝B』には原作が存在しており、それが総主教メソディオス1世（在位843–847年）の現存しない『セオドロス頌辞』であったとの提起が行われた<sup>(40)</sup>。この問題については、次節と大きく関わってくる。

### Ⅲ. ストゥディオス修道士のシスマ

ビザンツではほぼ120年にわたって続いたイコンをめぐる対立は、息子の皇帝ミハイル3世（在位842–867年）の摂政として実権を握った崇拜派のセオドラによって幕が下ろされた。セオドラにその大役を託されたのは、シチリア出身の修道士メソディオスであった。彼は、コンスタンティノーブル総主教メソディオス1世（在位843–847年）として843年に首都で教会会議を開催し、イコン崇拜の復活を宣言した。その際に、彼が作成した文書は、毎年復活祭前の四旬節最初の日曜日の正教祭で読み上げられる儀式書『正統信仰のシノディコン（Τὸ συνοδικὸν τῆς Ὀρθοδοξίας）』となった<sup>(41)</sup>。その文書では、正統信仰の守護者を記念する一方で、イコン破壊者などを呪詛する形式をとっている。現存する文書が成立当初の形を完全にとどめている訳ではないが、そこではストゥディオス修道院長セオドロスも記念されている<sup>(42)</sup>。しかし、ストゥディオス修道院と総主教メソディオスの関係は、必ずしも良好ではなく、845年または846年には「ストゥディオス修道士のシスマ」という事件が発生した<sup>(43)</sup>。

この事件に関連して、メソディオスがストゥディオス修道士に宛てた2通の書簡と8つの断片史料が存在する<sup>(44)</sup>。1通の書簡は、セオドロスの後継者ナフクラティオスとアサナシオスの2人に対する告発状であり、もう1通は彼らを呪詛した破門状である。告発の根拠は、彼ら2人がセオドロスから共同体を引き継いだ手続き上の問題であったが、実際には、総主教の権威を否定したことに対する処置であった。メソディオスは、かつてセオドロスが2人の総主教タラシオス（在位787-806年）とニキフォロス1世を非難して書いた文書の呪詛を2人に求めたが受け入れられなかった。しかし、この継承手続き問題は、イコン破壊派の聖職者に対する処遇について、すでに両者間に存在していた対立の口実でしかなかったであろう。

ここで注意が必要なのは、メソディオスがセオドロスの文書を呪詛の対象にしながらも、むしろ自説を捨てて総主教に恭順したと一方的に賞賛されたセオドロスの権威をメソディオスが利用していたことである。それは、このシスマ直前の844年にセオドロスと弟のヨシフの聖遺物が首都に移送される許可をメソディオスが与えていたことから窺える<sup>(45)</sup>。したがって、クラウドミュラーが主張するように、メソディオスがセオドロスを讃える頌辞を書いた可能性も十分にあるといえる。

#### IV. 新神学者シメオンとストゥディオス修道院

10世紀の半ばに生まれた新神学者シメオン〔以下、シメオン〕は、ストゥディオス修道院で1年足らずの修練士生活を送ったが、実際にはストゥディオス修道士にはならず、同じコンスタンティノーブルにある聖ママス修道院で修道生活を送り、そこで院長となった。しかし、彼は、14歳の時に頼りとしていたスパサロクヴィクラリオス（σπαθαροκουβικουλάριος）の爵位を持つ高官の伯父を亡くすと<sup>(46)</sup>、ストゥディオス修道士のシメオン（シメオン=ストゥディティス〔以下、ストゥディティス〕）の霊子と

なり、以来ストゥディティスが亡くなるまで20年以上にわたり、霊的指導を受けた。さらに、シメオンが追放中に弟子となり、彼の聖人伝を書いたニキタス=スティサトスは<sup>(47)</sup>、後にストゥディオス修道院長となった。シメオンの思想と行動にはストゥディオス修道院と大きな繋がりがあると考えられることができる。霊父ストゥディティスは、彼にいわば霊的英才教育を施したが、その方針がストゥディティスの修道講話に示されている<sup>(48)</sup>。シメオンに関する近年の研究の中で注目すべきは、H. アルフェイエフ（Alfeyev）とH. J. M. タナー（Turner）の著作である<sup>(49)</sup>。シメオンの活動を前者は、古代の教父に連なる教育の系譜と見るのに対して、後者は、同時代の社会で人々を結びつける霊父の役割を強調している。さらに、美術史家のC. バーバー（Barber）がイコン破壊運動後に生まれたイコン神学に対するシメオンを含む11世紀の人々の思想的立場を比較している<sup>(50)</sup>。シメオンが同時代人から現実にはどのように見られていたのかを知る手がかりを提示している。

シメオンの著作は、セオドロスのそれとは対照的にほとんどが『キリスト教資料叢書』の中でフランス語対訳付きで新しい校訂版に置き換えられ、他の現代語訳も出版されている。またシメオンの現存する4通の書簡の内、1通しか校訂版が存在していなかったが、近年全ての書簡が英訳とともに出版された<sup>(51)</sup>。したがって本稿では古い校訂版やそれを基にした再編集版については言及しない。彼の著作は、以下のように整理される。『講話』34編<sup>(52)</sup>、『感謝祈祷文』2編<sup>(53)</sup>、『章』3編<sup>(54)</sup>、『神学論文』3編<sup>(55)</sup>、『倫理論文』15編<sup>(56)</sup>、『聖歌』58編<sup>(57)</sup>。

#### V. 11世紀のストゥディオス修道院

7世紀から15世紀の61に及ぶティピコンを英訳した『ビザンツ修道院創設文書集』全5巻は、この分野の研究に多大な貢献をもたらしているが、そのストゥディオス修道院に関する解説で、同院が10世紀末に帝国権威の敵対者から支持者

に変わり、そのために帝国修道院となったという概観が示されている<sup>(58)</sup>。もちろんこれは、結果論であり、その文書史料が残されている訳ではない。筆者の考えでは、むしろ事態は逆で、11世紀の前半に皇帝の側がストゥディオス修道院の支持者になったように思える。10世紀末の新神学者シメオンの活動が、それまで絶対の霊的指導力を持てはなかったストゥディオス修道院長にカリスマ的性格を備えさせた結果、歴代皇帝の霊父として権力を獲得することが可能になったのである。

1066年にストゥディオス修道院長ミハイル＝メルメントゥロスの命を受け、同院修士セオドロスが作成した大英博物館蔵『セオドロス詩編』の細密画には、神による院長の叙任が描かれている<sup>(59)</sup>。メルメントゥロスは、2度にわたる総主教ミハイル1世（在位1043–58年）の干渉、1度目は1044年の『正統信仰のシノディコン』からのセオドロスの箇条削除、2度目は1050年頃の修士司祭のベルト着用非難を皇子の皇帝コンスタンティノス9世（在位1042–55年）の介入によって排除した<sup>(60)</sup>。こうした院長のカリスマ化に寄与したのがシメオンの弟子でストゥディオス修士ニキタス＝スティサトスであった。彼は、師の多数の著作を編纂し<sup>(61)</sup>、1052年にはシメオンの聖遺物を首都に移送した後、彼の聖人伝を書いて、その独特な霊父理解を広めた。ニキタスは、その一方で、「1054年のシスマ」に関与し、教皇レオ9世の使節のフンベルトゥスなどと神学論争を行った<sup>(62)</sup>。

10世紀末から12世紀末の間に、ストゥディオス修道院から3人の総主教、アンドニオス3世（在位974–979年）、アレクシオス1世（1025–43年）、ドシセオス（1189, 1189–91年）が輩出された。3人とも教令を發布しているが、アレクシオス1世が1027年11月と1028年1月に發布した2つの教令は、ビザンツ全体の修道院に関わる重要なものであった。それらの教令では、当時問題化していた修道院財産の一般信者への委託制度「ハリストイキ（χαριστική）」の是正策

が示された<sup>(63)</sup>。またアレクシオスは、1034年、コンスタンティノーブルに聖母就寝修道院を創設したが、その際、現存しているものとは別で、より原型に近いストゥディオス修道院の『規則』を基に、『ティピコン』を作成した。この『ティピコン』は、現存しないが、1062年にキエフのベチュルスキー修道院長に就任したフェオドシーがそれを利用したため、スラヴ語翻訳版が残された。これまで、このスラヴ語版は、部分的な校訂版しかなかったが、近年ほぼ完全な12世紀のモスクワ＝シノド図書館スラヴ語写本330/380に基づく校訂版が出版された<sup>(64)</sup>。

### おわりに

1204年に首都コンスタンティノーブルが十字軍によって占領された際、ストゥディオス修道院は、一時放棄されてしまうが、首都が奪還された後、1293年に再建された。14世紀前半に修士セオクティストスは、コンスタンティノーブル総主教アサナシオス1世（在位1289–93年）を讃える積極的な執筆活動を行い、聖人伝、頌辞、奇蹟譚などを生み出した<sup>(65)</sup>。そこには、修士時代のアサナシオスの姿を通して、修道服による院内の階層意識など多くの情報が記されている。こうして、1453年に再びコンスタンティノーブルがオスマン＝トルコに占領され、最終的に修道院としての活動を停止するまでの間、ストゥディオス修士は、やはり歴史的に重要な史料を残し続けていた。

### <注>

- (1) R. Janin, *La Géographie ecclésiastique de l'Empire byzantin*, III: *Les églises et les monastères*, 2e éd., (Paris 1969), 430-440; A. P. Kazhdan, Alice-Mary Talbot and A. Cutler, *Stoudios Monastery, The Oxford Dictionary of Byzantium=ODB*, ed. A. P. Kazhdan, III, (New York / Oxford 1991), 1960-1961; Hans-Georg Beck, *Kirche und theologische Literatur im byzantinischen Reich*, (Handbuch der Altertumswissenschaft: in systematischer auf

- Geschichte und Methodik der einzelnen Disziplinen, 12: Byzantinisches Handbuch, 2.1), (München 1959).  
 ビザンツの修道院研究全般については、以下の最近の研究を参照。Peter Hatlie, *The monks and monasteries of Constantinople, CA.350-850*, (Cambridge 2007); И. И. Соколов, *Состояние монашества в Византийской Церкви с середины IX до начала XIII века (842-1204): опыт церковно-исторического исследования*, (Библиотека христианской мысли, Исследования), (С.-Петербург 2003); Kostis Smyrlis, *La fortune des grands monastères byzantins: fin du Xe-milieu du XIVe siècle*, (Travaux et mémoires du Centre de recherche d'histoire et civilisation de Byzance, Monographies, 21), (Paris 2006).
- (2) *Theophanis chronographia*, ed. Carolus de Boor, I, (Leipzig 1883 / Hildesheim 1963, 1980), 112-113; *The chronicle of Theophanes Confessor: Byzantine and Near Eastern history, AD 284-813*, trans. Cyril Mango and Roger Scott, (Oxford 1997), 174-175; *Thesaurus Theophanis Confessoris: chronographia*, cur. Bernard Coulie, Panayotis Yannopoulos et CETEDOC, (Corpus Christianorum, Thesaurus patrum Graecorum), (Turnhout 1998).
- (3) Theodoros Anagnostes, *Kirchengeschichte*, 2. Aufl., hrsg. Günther Christian Hansen, (Die griechischen christlichen Schriftsteller der ersten Jahrhunderte, Neue Folge, 3), (Berlin 1995), 108; C. Mango, The Date of the Studius Basilica at Istanbul, *Byzantine and Modern Greek Studies*, 4, (1978), 115-122, esp. 116; B. Baldwin, Theodore Lector, *ODB*, III, 2042.
- (4) Theodoros, *Kirchengeschichte*, (1995), 109.
- (5) *Anthologia Graeca, Epigrammatum palatina cum Planudea*, ed. Hugo Stadtmueller, (Bibliotheca scriptorum Graecorum et Romanorum Teubneriana), I, (Leipzig 1894), 2; *The Greek anthology*, Rev. ed., trans. W.R. Paton and rev. Michael A. Tueller, (The Loeb classical library, 67), I, (Cambridge, Mass. 2014), 6; *Anthologie palatine*, 2e éd., éd. et trad. Pierre Waltz, (Collection des universités de France, Anthologie grecque, 1), I, (Paris 1960), 14; 沓掛良彦訳『ギリシア詞華集』(西洋古典叢書), (京都大学学術出版会 2015), 7-8; Alan Cameron, *The Greek anthology: from Meleager to Planudes*, (Oxford / New York 1993).
- (6) *Chronicon Paschale: ad exemplar Vaticanum*, ed. Ludovicus Dindorfius, (Corpus scriptorum historiae Byzantinae), I, (Bonn 1832), 591; *Chronicon Paschale 284-628 AD*, trans. Michael Whitby and Mary Whitby, (Translated texts for historians, 7), (Liverpool 1989), 82; *Chronica minora saec. IV. V. VI. VII*, ed. Theodorus Mommsen, (Monumenta Germaniae Historica, Auctorum antiquissimorum, 11), II, (Berlin 1894), 86; Janin, *La Géographie ecclésiastique*, III, (1969), 430; Mango, The Date of the Studius Basilica, (1978), 116.
- (7) *Chronicon Paschale*, I, (1832), 591; *Chronicon Paschale 284-628 AD*, (1989), 82; *Chronica minora*, II, (1894), 84-85.
- (8) U. Peschlow, Die Johanneskirche des Studios in Istanbul: Bericht über die jüngsten Untersuchungsergebnisse, *XVI. Internationaler Byzantinistenkongress, Wien, 4.-9. Oktober 1981, Akten* II.4, (Jahrbuch der Österreichischen Byzantinik. 32.4), (Wien 1982), 429-434; 建築学の観点からの考察については、以下を参照。太記祐一「史料に見る9～10世紀のストゥディオス修道院」『福岡大学工学集報』74, (2005), 99-105; 同「ストゥディオス修道院の9～10世紀における附属施設について」『日本建築学会計画系論文集』73, (2008), 235-240.
- (9) *Suidae lexicon*, ed. Ada Adler, (Lexicographi Graeci, 1), IV, (Leipzig 1935), 438. 傍注には、それに続いて、ストゥディオスがフリイア地方のナコリアで大天使ミハイルの聖堂を建設したと記されている。
- (10) *Theophanis chronographia*, I, (1883), 113; *The chronicle of Theophanes Confessor*, (1997), 175.
- (11) Janin, *La Géographie ecclésiastique*, III, (1969), 16-17; Id., *La Géographie ecclésiastique de l'Empire*

- byzantin, II: *Les églises et les monastères des grands centres byzantins: Bithynie, Hellespont, Latros, Galèsios, Trébizonde, Athènes, Thessalonique*, (Paris 1975), 13-15; Alice-Mary Talbot and R. F. Taft, Monastery of Akoimetoï, *ODB*, I, 46; A. Kazhdan, Alexander the Akoimetos, *ODB*, I, 59; Id., Marcellus the Akoimetos, *ODB*, II, 1300-1301; Beck, *Kirche und theologische Literatur*, (1959), 213; E. Wölffe, Der Abt Hyptios von Ruphinianai und der Akoimete Alexander, *Byzantinische Zeitschrift*, 79, (1989), 302-309; *Vie d'Alexandre l'Acémète*, éd. E. de Stoop, (*Patrologia Orientalis*, 6.5), (Turnhout 1911), 658-701; E. Theokritoff, The Life of Our Holy Father Alexander, *Aram*, 3 (1991), 293-318; D. Caner, *Wandering, Begging Monks: Spiritual Authority and the Promotion of Monasticism in Late Antiquity*, (Berkeley, Cal. 2002), 249-280; G. Dagron, La vie ancienne de saint Marcel l'Acémète, *Analecta Bollandiana*=AB, 86, (1968), 271-321; J.-M. Bagnard, *Les Moines acémètes: Vies des saints Alexandre, Marcel et Jean Calybite*, (*Spiritualité Orientale*, 47), (Bégrolles-en-Mauges 1988), 79-120, 149-192, 203-280.
- (12) T. T. Martynyuk, San Teodoro Studita quale fonte dei canoni del *Codex Canonum Ecclesiarum Orientalium*, *Iura Orientalia*, 5, (2009), 75-88.
- (13) Roman Cholij, *Theodore the Stoudite: the ordering of holiness*, (Oxford theological monographs), (Oxford 2002); Thomas Pratsch, *Theodoros Studites (759-826): zwischen Dogma und Pragma: der Abt des Studiosklosters in Konstantinopel im Spannungsfeld von Patriarch, Kaiser und eigenem Anspruch*, (*Berliner byzantinistische Studien*, 4), (Frankfurt am Main 1998); Peter J. Hatlie, *Abbot Theodore and the Stoudites: a case study in monastic social groupings and religious conflict in Constantinople (787-826)*, Ph. D., (Fordham University 1993).
- (14) T. ティンネフェルト (Tinnefeld) の書評を参照。 *Byzantinische Zeitschrift*, 93, (2000), 229-231.
- (15) S. Efthymiadis, Notes on the correspondence of Theodore the Studite, *Revue des études byzantines*=REB, 53, (1995), 147-163.
- (16) 中谷功治「ストゥディオスのテオドロスと「姦通論争」(795-811年)」『西洋史学』186, (1997), 1-19; Leslie Brubaker and John Haldon, *Byzantium in the iconoclast era, c. 680-850: a history*, (Cambridge 2011); Leslie Brubaker and John Haldon, *Byzantium in the iconoclast era (ca 680-850): the sources: an annotated survey*, (*Birmingham Byzantine and Ottoman monographs*, 7), (Aldershot 2001).
- (17) *Theodori Studitae epistulae*, hrsg. Georgios Fatouros, 2 Bde. (*Corpus fontium historiae Byzantinae*, 31. Series Berolinensis), (Berlin 1992), この校訂版の解説21-38頁, 120-125頁では, 書簡の校訂版と翻訳版, さらに彼の著作の校訂版などの紹介をしている。ギリシアで出版された *Ἐπιστολαὶ τοῦ ὁσίου πατρὸς ἡμῶν καὶ ὁμολογητοῦ Θεοδώρου ἡγουμένου τῶν Στουδίου*, (Ἁγίου Θεοδώρου Στουδίτου ἔργα, 3), (Θεσσαλονίκη 1987) は, 後述の『教父著作大全』にも収録されているシルモン版 J. Sirmond, *Opera varia*, V: *Sancti Theodori Studitae epistolae, aliaque scripta dogmatica, Graece et Latine*, (Paris 1696), 221-753を再編集したものであり, 実質273通を収録している。現代語訳で現実的に利用可能なものは, ほとんどない。あえてあげるとすれば, B. Hermann, *Das heiligen Abtes Theodor von Studion Martyrbreife aus der Ostkirche*, (Mainz 1931)に66通がドイツ語訳されている。
- (18) K. I. Δαλκός, *Θεοδώρου τοῦ Στουδίτου Λόγοι Ἀντιρρητικοὶ κατὰ εἰκονομάχων*, (Αθήναι 1998); *Patrologia cursus completus, Series graeca*, éd. J. -P. Migne=PG, 99, 328-436 =J. Sirmond, *Opera varia*, V, (1696), 89-168.
- (19) St. Theodore the Studite, *On the holy icons*, trans. Catharine P. Roth, (*Popular patristics series*), (Crestwood 1981); Theodore the Studite, *Writings on iconoclasm*, trans. Thomas Cattoi, (*Ancient Christian writers*, 69), (New York 2015) 45-119; ストゥディオ



- スのテオドロス（鳥巢義文訳）「聖画像破壊論者への第1の駁論」（上智大学中世思想研究所編訳・監修）『後期ギリシア教父・ビザンティン思想』,（中世思想原典集成, 3）,（平凡社 1994）, 717-744。
- (20) サクディオン修道院については、その遺構調査報告であるM.-F. Auzépy, O. Delouis, J.-P. Grégois et M. Kaplan, *À propos des monastères de Médikion et de Sakkoudiôn*, *REB*, 63, (2005), 183-194やJ. Lefort, *Les communications entre Constantinople et le Bithynie, Constantinople and its hinterland*, ed. Cyril Mango and Gilbert Dagron, (Society for the Promotion of Byzantine Studies publications, 3), (Aldershot 1995), 207-218を参照。
- (21) J. Leroy, *La réforme Studite, Il monachismo Orientale*, (Orientalia Christiana Analecta, 153), (1958), 181-214. セオドロスの修道講話などに関するJ. ルロワの主要な論考は、以下の論文集中に収録されている。J. Leroy, *Études sur le monachisme byzantin*, (Spiritualité Orientale, 85), (Bégrolles-en-Mauges 2007); 拙稿「都市コンスタンティノーブルの修道制——10世紀のストゥディオ修道院を中心に——」『キリスト教史学』63, (2009), 131-147。
- (22) *Sancti patris nostri et confessoris Theodori Studitis praepositi parva catechesis*, éd. E. Auvray, (Paris 1891). なお, *Μικρά κατήχησις τοῦ ὁσίου πατρὸς ἡμῶν καὶ ὁμολογητοῦ Θεοδώρου ἡγούμενου τῶν Στουδίου* (‘*Αἴγιου Θεοδώρου Στουδίτου ἔργα*, 2), (Θεσσαλονίκη 1984)は、オヴレ版を再編集したものである。
- (23) Théodore Studites, *Petites catéchèses*, trad. Anne-Marie Mohr, (Les Pères dans la foi, 52), (Paris 1993); Teodoro Studita, *Nelle prove, la fiducia: Piccole catechesi*, trad. Luigi d’Ayala Valva, (Magnano 2006).
- (24) J. Leroy, *La vie quotidienne du moine Studite, Irénikon*, 27, (1954), 21-50, surtout 24, n. 2. ; Id., *Études sur les Grandes catéchèses de S. Théodore Studite*, éd. Olivier Delouis, (Studi e testi, 456), (Città del Vaticano 2008) 300-311; Cholij, *Theodore the Stoudite*, (2002), 68. その他, 別系統写本の断片12編やストゥディオス修道院出身の総主教アンドニオス3世に帰されている講話4編が存在する。J. Leroy et O. Delouis, *Quelques inédits attribués à Antoine III Stoudite*, *REB*, 62, (2004), 5-81.
- (25) *Sancti Theodori Studitae sermones magnae catecheseos*, cur. J. Cozza-Luzi (Nova patrum bibliotheca=NPB, 9. 2), (Roma 1888), 1-217; *S.P.N. Theodori Studitae sermones reliqui magnae catecheseos*, cur. J. Cozza-Luzi (NPB, 10. 1), (Roma 1905), 7-151.
- (26) Théodore Stoudite, *Les grandes catéchèses. Livre I, Les épigrammes (I-XXIX)*, trad. Florence de Montleau, (Spiritualité orientale, 79), (Bégrolles-en-Mauges 2002).この翻訳者F. ド=モンローの解説33-37, 117-120頁から『修道大講話』第1, 2巻のテキスト刊行の現状を知ることができるが, コッザール版第8話が, 第2巻第120話(パバドプロス=ケラメフス版第116話)と同じであることを見落している。以下の検討と比較せよ。J. Leroy, *Un nouveau témoin de la Grande Catéchèse de saint Théodore Studite*, *REB*, 15, (1957), 73-88; Id., *Études sur les Grandes catéchèses*, (2008), 311-321; P. O’Connell, *The Letters and Catecheses of St Theodore Studites*, *Orientalia Christiana Periodica*, 38, (1972), 256-259; *Theodori Studitae epistulae*, (1992), 24\*-25\*; Cholij, *Theodore the Stoudite*, (2002), 67-73; O. Delouis, *Le Stoudite, le Bénédictin et les Grandes Catéchèses: autour de la traduction française d’un texte grec inédit*, *REB*, 61, (2003), 215-228.なおド=モンローの翻訳書の39-116頁にルロワの著書J. Leroy, *Studitisches Mönchtum, Spiritualität und Lebensform*, (Geist und Leben der Ostkirche, 4), (Graz, 1969)のフランス語版*Le monachisme Studite*が収録された。
- (27) *Τοῦ ὁσίου Θεοδώρου τοῦ Στουδίτου μεγάλη κατήχησις Βιβλίον δούτερον ἐκδοθὲν ὑπὸ τῆς αὐτοκρατορικῆς Ἀρχαιογραφικῆς ἐπιτροπῆς*, ἐπιμ. Α. Παπαδόπουρος-Κεραμεύς, (C.-Πετερσбург 1904). この版を再編集した*Μεγάρη κατήχησις τοῦ*

- όσιου πατρός ἡμῶν Θεόδωρου Στουδίου (Βιβλίον Δεύτερον), (Ἁγίου Θεοδώρου Στουδίτου ἔργα, 1), (Θεσσαλονίκη 1987) が存在する。
- (28) *Творения преподобнаго отца нашего и исповедника Феодора Студита в русском переводе*, 2 тома, (С.-Петербург 1907-08).
- (29) *PG*, 99, 1813-24 = Simond, *Opera varia*, V, (1696), 80-88; *Theodore Studites: Testament of Theodore the Studite for the Monastery of St. John Stoudios in Constantinople*, trans. T. Miller, *Byzantine monastic foundation documents: a complete translation of the surviving founders' typika and testaments*=*BMFD*, I, ed. J. Thomas and A. C. Hero, (Dumbarton Oaks studies, 35), (Dumbarton Oaks 2000), 67-83; O. Delouis, *Le Testament de Théodore Stoudite: édition critique et traduction*, *REB*, 67, (2009), 77-109, texte 93-109; Id., *Le Testament de Théodore Stoudite est-il de Théodore?*, *REB*, 66, (2008), 173-190.
- (30) 大月康弘「ビザンツ中後期の文書『テュピコン』をめぐって」『一橋論叢』110, (1993), 672-681; M. Angold, *Were Byzantine monastic typika literature, The Making of Byzantine history: studies dedicated to Donald M. Nicol on his seventieth birthday*, ed. Roderick Beaton and Charlotte Roueché, (Centre for Hellenic Studies, King's College London, Publications, 1), (Aldershot 1993), 46-70.
- (31) *NPB*, 5, (1849), 111-125=*PG*, 99, 1704-20; A. Дмитриевский, *Описание литургических рукописей*, I, (Киев 1895 / Hildesheim 1965), 224-238. 両方の版からの英訳。 *Stoudios: Rule of the Monastery of St. John Stoudios in Constantinople*, trans. T. Miller, *BMFD*, I, (2000), 84-119.
- (32) *NPB*, 5, (1849), 78-90, 138-145=*PG*, 99, 1733-57.
- (33) D. Arnesano, *Gli epitimia de Teodoro Studita: due fogli ritrovati del Dossier di Casole*, *Byzantion*, 80, (2010), 9-37, testo 25-30; J. Featherstone, *A note on penances prescribed for negligent scribes and librarians in the Monastery of Studios*, *Scriptorium*, 36, (1982), 258-260.
- (34) Theodoros Studites, *Jamben auf verschiedene Gegenstände*, Text und Übers. Paul Speck, (*Supplementa Byzantina*), (Berlin 1968).
- (35) *Acta sanctorum*, April., I, (Antwerpen 1675 / Bruxelles 1968), xlvi-lv=*PG*, 99, 804-849; F. Halkin, *Bibliotheca hagiographica graeca*=*BHG*, 3e éd., (*Subsidia hagiographica*, 8a), (Bruxelles 1957); Id., *Auctarium Bibliothecae hagiographicae Graecae*, (*Subsidia hagiographica*, 47), (Bruxelles 1969); Id., *Novum auctarium: bibliothecae hagiographicae Graecae*, (*Subsidia hagiographica*, 65), (Bruxelles 1984), No. 1553.
- (36) *NPB*, 6.2, (1853), 364-378=*PG*, 99, 884-901; Teodoro Studita, *Catechesi-epitafio per la madre*, cur. e trad. A. Pignani, (*Hellenica et Byzantina Neapolitana*, 22), (Napoli 2007); S. Efthymiadis (ed.) and J. M. Featherstone (trans.), *Establishing a Holy Lineage: Theodore the Studite's Funerary Catechism for His Mother (BHG2422)*, *Theatron: rhetorische Kultur in Spätantike und Mittelalter*, hrsg. M. Grünbart, (*Millennium-Studien: zu Kultur und Geschichte des ersten Jahrtausends n. Chr.*, 13), (Berlin 2007), 13-51=S. Efthymiadis, *Hagiography in Byzantium: literature, social history and cult*, (*Variorum collected studies series*), (Farnham 2011), XI; *BHG*, No. 2422.
- (37) Id., *Le panégyrique de S. Théopane le Confesseur par S. Théodore Stoudite (BHG 1792b): édition critique du texte intégral*, *AB*, 111, (1993), 259-290.
- (38) Id., *Hagiography from the 'Dark Age' to the Age of Symeon Metaphrastes (Eighth-Tenth Centuries)*, *Ashgate research companion to Byzantine hagiography*. I, ed. S. Efthymiades, (*Ashgate research companion*), (Farnham 2011), 95-142; *Theodori Studitae epistulae*, (1992), 3\*-4\*; Vita A (*BHG* No. 1755): Simond, *Opera varia*, V, (1696), 1-79=*PG*, 99, 113-232; Vita B (*BHG* No. 1754): *NPB*, 6.2, (1853) 293-363=*PG*, 99, 233-328; Vita C (*BHG* No. 1755d): A. П. Доброклонский, *Преп. Феодор, исповедник и игумен Студийский*, I, (Одесса 1913), xxxiv-xc; B. Latyshev, Vita S. Theodori Studitae in

- codice Mosquensi musei Rumianzoviani no 520, *Византийский Временник*, 21, (1914), 255-304. 聖人伝Dは、断片しか伝わっていないが、その校訂版とフランス語訳がある。Vita D (BHG No. 1755f): T. Matantseva, Un fragment d'une nouvelle Vie de saint Théodore Stoudite, *Vie D (BHG 1755f)*, *Byzantinische Forschungen*, 23, (1996), 151-163.
- (39) Beck, *Kirche und theologische Literatur*, (1959), 504.
- (40) D. Krausmüller, Patriarch Methodius, the Author of the Lost First *Life* of Theodore of Stoudios, *Symbolae Osloenses*, 81, (2006), 144-150.
- (41) J. Gouillard, Le synodikon de l'Orthodoxie, édition et commentaire, *Travaux et mémoires*, 2, (1967), 1-317, texte et trad. 44-107.
- (42) *Ibid.*, 53.
- (43) V. Grumel et J. Darrouzès, *Les registres des actes du patriarcat de Constantinople*, I: *Les actes des patriarches*, ii et iii: *Les registres de 715 à 1206*, 2e éd. =GDR, (Paris 1989), Nos. 425a, 427a, 429, 431, 432, 435, 436.
- (44) J. Darrouzès, Le patriarche Méthode contre les iconoclastes et les Stoudites, *REB*, 45, (1987), 15-57, texte et trad. 30-57; I. Doen und C. Hannick, Das Periorismos Dekret des Patriarchen Methodios I. gegen die Studiten Naukratios und Athanasios, *Jahrbuch der Österreichischen Byzantinistik*, 22, (1973), 93-102, Text 97-102.
- (45) 2人の遺体の移送を描いた聖人文学 (BHG, No 1756t)。C. van de Vorst, La translation de S. Théodore Studite et de S. Joseph de Thessalonique, *AB*, (1913), 27-62, texte 50-61; Доброклонский, *Преп. Феодор*, I, (1913), i-xv.
- (46) 拙稿「新神学者シメオン (949頃-1022年) と一般信者の霊的父子関係」, 『オリエント』, 50.1, (2007), 192の爵位名は誤表記。
- (47) 現在でもフランス語対訳のオゼル版が最良の校訂本であり、その後、現代ギリシア語訳と英訳を伴って出されたテキストは、別の写本も参照しているが基本的にはオゼル版とほぼ同一である。Nicétas Stéthatos, *Un grand mystique byzantin: vie de Syméon le Nouveau Théologien*, (Orientalia Christiana 12), éd. I. Hausherr et trad. G. Horn, (Roma 1928); *Νικήτα τοῦ Στηθάτου Βίος καὶ Πολιτεία τοῦ ἐν ἀγίοις πατρὸς ἡμῶν Συμεῶν τοῦ Νέου Θεολόγου*, κείμενο καὶ μετάφραση Σ. Π. Κούτσας, (Ἀγιολογικὴ Βιβλιοθήκη, 6), (Νέα Σμύρνη 1994); Niketas Stethatos, *The Life of Saint Symeon the New Theologian*, trans. R. H. Greenfield, (Dumbarton Oaks Medieval Library, 20), (Dumbarton Oaks 2013).
- (48) Syméon le Studite, *Le Discours ascétique*, (Sources Chrétiennes=SC, 460), éd. H. Alfeyev et trad. L. Neyrand, (Paris 2001). PG, 120, 668-688所収の『章』120-152がストゥディティスの著作であるとのオゼルとクラウスミュラーの意見についてこの『講話』の校訂者は、論じていない。Nicétas, *Un grand mystique*, (1928), xlv-xlvii; D. Krausmüller, The monastic communities of Stoudios and St Mamas in the second half of the tenth century, *The Theotokos Evergetis and eleventh-century monasticism*. ed. Margaret Mullett and Anthony Kirby, (Belfast Byzantine texts and translations, 6.1), (Belfast 1994), 67-102.
- (49) H. Alfeyev, *St. Symeon, the New Theologian, and orthodox tradition*, (Oxford Early Christian Studies), (Oxford 2000); H. J. M. Turner, *St. Symeon The New Theologian and spiritual fatherhood*, (Byzantina Neerlandica), (Leiden 1990).
- (50) C. Barber, *Contesting the logic of painting: art and understanding in eleventh-century Byzantium*, (Visualising the Middle Ages, 2), (Leiden 2007).
- (51) *The Epistles of St Symeon the New Theologian*, ed. and trans. H.J.M. Turner, (Oxford early Christian texts), (Oxford 2009); Id., *Symeon the New Theologian, Epistle 2: Concerning repentance, and what a person who has recently confessed should do*, *Metaphrastes, or, Gained in translation: essays and translations in honour of Robert H. Jordan*, ed. M. Mullett, (Belfast Byzantine texts and translations, 9),

- (Belfast 2004), 236-239.
- 52) Syméon le Nouveau Théologien, *Catéchèses*, I-III, (SC, 96, 104, 113), éd. B. Krivochéine et trad. J. Paramelle, (Paris 1963-1965); Symeon the New Theologian, *The discourses*, trans. C.J. de Catanzaro, (The classics of Western spirituality), (New York 1980), 41-358.
- 53) Syméon le Nouveau Théologien, *Action de grâces*, 1-2, (SC, 113), éd. B. Krivochéine et trad. J. Paramelle, (Paris 1965), 304-357; Symeon, *The discourses*, (1980), 359-378.
- 54) Syméon le Nouveau Théologien, *Chaptires théologiques, gnostiques et pratiques*, (CS, 51), éd. et trad. J. Darrouzès, (Paris 1957); Symeon the New Theologian, *The practical and theological chapters and Three theological discourses*, trans. P. McGuckin, (Cistercian studies series, 41), (Kalamazoo 1982), 31-103. 実質全226章。第1部の101章のみ日本語訳がある。新神学者シメオン（篠崎榮訳）「100の実践的・神学的主要則」『後期ギリシア教父・ビザンティン思想』, (1994), 751-781。18世紀末にギリシアで信仰のために作成された教父著作選集『フィロカリア』にはシメオンの150章が収録されている。Φιλοκαλία των Ιερών Νηπτικόν, III, (Αθήναι 1991), 237-270; 新神学者シメオン(坂田奈々絵訳)「実践と神学についての断章」『フィロカリア』VI, (新世社 2013), 155-219。
- 55) Syméon le Nouveau Théologien, *Traité théologiques et éthiques*, (SC, 122), éd. et trad. J. Darrouzès, (Paris 1966), 96-168; Symeon, *The practical and theological*. (1982), 107-140.
- 56) Syméon le Nouveau Théologien, *Traité théologiques et éthiques*, I-II, (SC, 122, 129), éd. et trad. J. Darrouzès, (Paris 1966-1967); St. Symeon, the New Theologian, *On the mystical life: the ethical discourses*, I and II, trans. A. Golitzin, (Crestwood 1995-96).
- 57) Syméon le Nouveau Théologien, *Hymnes*, I-III, (SC, 156, 174, 196), éd. J. Koder et trad. J. Paramelle et L. Neyrand, (Paris 1969-1973); Symeon Neos Theologos, *Hymnen*, hrsg. A. Kambylis, (Supplementa Byzantina, 3), (Berlin / New York 1976); St. Symeon the New Theologian, *Hymns of divine love*, trans. G. A. Maloney, (Denville 1976); *Divine eros: hymns of St. Symeon, the New Theologian*, trans. D. K. Griggs, (Popular Patristics, 40), (Crestwood 2010); Symeon der Neue Theologe, *Lichtvisionen: Hymnen über die mystische Schau des göttlichen Lichtes*, Übers. L. Heiser, (Berlin / Münster 2006).
- 58) *BMFD*, I, (2000), 69.
- 59) *Theodore Psalter, Electronic Facsimile*, CD-Rom ed. C. Barber, (Champaign, Il. 2000); D. Kausmüller, *Abbots and Monks in Eleventh-Century Studios: An Analysis of Rituals of Installation and Their Depictions in Illuminated Manuscripts*, *REB*, 64-65, (2006-2007), 255-282.
- 60) Joannes Skylitzes, *Synopsis historiarum* (Corpus Fontium Historiae Byzantinae, 5), hrsg. Hans Thurn, (Berlin 1973), 434; Jean Skylitzès, *Empereurs de Constantinople*, trad. Bernard Flusin et annoté Jean-Claude Cheynet, (Réalités Byzantines, 8), (Paris 2003), 361; John Skylitzes, *A Synopsis of Byzantine history, 811-1057*, trans. John Wortley, (Cambridge 2010), 408; Petri Antiocheni Epistola ad Michaelem Cerularium, *Acta et scripta quae de cortoversiis ecclesiae Graecae et Latinae saeculo undecimo composita erant*, hrsg. C. Will, (Leipzig 1861 / Frankfurt 1963), 200.ニキタス=ステイサトスの小論『ストゥディオス修道士の服装について』は、ベルト着用問題に関連して書かれたと考えられる。Nicétas Stéthatos, *Sur des coutumes Studites, Opuscules et lettres*, (SC, 81), éd. et trad. J. Darrouzès, (Paris 1961), 486-506, surtout 488. ステイサトスの著作と書簡は、ほとんどが同刊本に収録されているが、近年彼の楽園に関する小論と8通の書簡がこの校訂版からロシア語訳された。Н. Ким, *Рай и человек: наследие преподобного Никиты Студита*, (Византийская библиотека, Исследования), (С.-Петербург 2003), 87-248; F. Lauritzen, *Stethatos' Paradise in Psellos' Ekphrasis of Mt Olympos* (Orat.

- min. 36 Littlewood), *Византийский Временник*, 70, (2011), 139-150. また『フィロカリア』に彼の300章も収録されている。*Φιλοκαλία*, III, (1991), 272-355; ニケタス (桑原直己訳) 『フィロカリア』VI, (2013), 221-365; F. Tinnefelt, Nicetas Stethatos, *Theologische Realenzyklopädie*, hrsg. Gerhard Krause und Gerhard Müller, 24, (1994), 463-464.
- (61) Syméon le Nouveau Théologien, *Catéchèses*, I, (1963), 55-57.
- (62) この前後に書かれた彼の著作は以下に所収。  
Anton Michel, *Humbert und Kerullarios*, II, (Forschungen aus dem Gebiete der Geschichte, 23), (Paderborn 1930), 320-321, 322-342. 後者のラテン語版。*Acta et scripta*, (1861), 127-136=PG, 120, 1011-1022=Patrologia cursus completus, Series latina, ed. J. -P. Migne=PL, 143, 973-984; *Monumenta Graeca ad Photium ejusque historiam pertinentia*, ed. J. Hergenröther, (Regensburg 1869 / Farnborough 1969), 139-154. フンベルトゥスの『反論』および論争の経緯を報告した『小覚書』。*Acta et scripta*, (1861), 136-150=PL, 143, 983-1000; *Acta et scripta*, (1861), 150-152=PL, 143, 1001-1004; 拙稿「1054年の「シスマ」再考」『白山史学』34, (1998), 38-61; Axel Bayer, *Spaltung der Christenheit: das sogenannte Morgenländische Schisma von 1054*, (Beihefte zum Archiv für Kulturgeschichte, 53), (Köln 2002); Id., Das sogenannte Schisma von 1054, *Vom Schisma zu den Kreuzzügen, 1054-1204*, hrsg. Peter Bruns und Georg Gresser, (Paderborn 2005), 27-39; Henry Chadwick, *East and West: the making of a rift in the Church: from apostolic times until the Council of Florence*, (Oxford history of the Christian Church), (Oxford 2003), 206-218.
- (63) Γ. Α. Ῥάλλης καὶ Μ. Ποτλῆς, *Σύταγμα τῶν θεῶν καὶ ἱερῶν Κανόνων*, V, (Αθήναι 1855 / 1992), 20-24, 25-32 =PG, 119, 828-837, 837-844 =J. D. Mansi, *Sacrorum conciliorum nova et amplissima collectio*, 19, (Venezia 1774 / Paris 1902 / Graz 1960), 461-468, 468-477; これらには、日本語訳がある。
- 大月康弘「アレクシオ・ストゥディテスによるカリスティキア改革のための2通の『覚え書き』」『成城大学経済研究』129, (1995) 74-78, 84-89; *GDR*, Nos. 833, 835; 拙稿「ヨアネス・オクセイテスのカリスティキエ批判——11世紀ビザンツにおける修道院改革の一断面——」『キリスト教史学』54, (2000), 80-92; 大月康弘「10-11世紀ビザンツ社会のカリスティキア——教会施設管理の俗人委託慣行と国家権力——」(渡辺節夫編)『ヨーロッパ中世の権力編成と展開』東京大学出版会, (2003), 41-75; 同『帝国と慈善 ビザンツ』(創文社 2005), 238-268.
- (64) А. М. Пентковский, *Типикон патриарха Алексия Студита в Византии и на Руси*, (Москва 2001); Д. С. Ищенко, «Устав Студийский» по списку XII в. (фрагменты), *Источники по истории русского языка*, ред. С. И. Котков и В. Я. Дерягин, (Москва 1976), 109-130. 部分的な英訳。D. M. Petras, *The Typicon of the Patriarch Alexis the Studite: Novgorod – St. Sophia 1136*, (Cleveland 1991); F. von Lelienfeld, *The Spirituality of the early Kievan Caves Monastery, Slavic cultures in the Middle Ages*, ed. Boris Gasparov and Olga Raevsky-Hughes, (California Slavic studies, 16. Christianity and the Eastern Slavs, 1), (Berkeley 1993), 63-76; Я. Н. Щапов, *Монашество на Руси в XI-XIII веках, Монашество и монастыри в России, XI-XX века: исторические очерки*, ред. Н. В. Синицына, (Москва 2002), 13-24. 『ロシア原初年代記』にフェオドシーがストゥディオス修道士ミハイルから『ティピコン』を入手した経緯が詳しく説明されている。(國本哲男他訳)『ロシア原初年代記』(名古屋大学出版会 1987), 182-183; *Лаврентьевская летопись и Суздальская летопись по академическому списку*, (Полное собрание русских летописей, 1), (Ленинград 1926 / Москва 1962).
- (65) 『聖人伝』(BHG, No. 194) : А. Пападопуло-Керамевс, *Жития двух вселенских патриархов XIV в., св. Афанасия I и Исидора I*, *Записки Историко-филологического факультета, Императорского*

*C.-Петербургскаго университета*, 76, (1905), i-x, 1-51; H. Delehaye, La vie d'Athanase patriarche de Constantinople (1289-1293, 1304-1310), *Mélanges d'Archéologie et d'Histoire*, 17, (1897), 39-75 = Id., *Mélanges d'hagiographie grecque et latine*, (Subsidia hagiographica, 42), (Bruxelles 1966), 125-149. 『頌辞』 (BHG, No. 194a-b): R. Fusco, L'Encomio di Teoctisto Studite per Anastasio I di Costantinopoli (BHG 194a-b), *Rivista di Studi Bizantini e Neoellenici*, 34, (1997), 83-153. 『奇蹟譚』 (BHG, No. 194f) : A.-M. Talbot, *Faith Healing in Late Byzantium: The Posthumous Miracles of the Patriarch Athanasios I of Constantinople by Theoktistos the Stoudite*, (Brookline 1983); Id., Fact and Fiction in the *Vita* of the Patriarch Athanasios I of Constantinople by Theoktistos the Stoudite, *Les vies des saints à Byzance: genre littéraire ou biographie historique?: actes du 2e colloque international philologique «EPMHNEIA», Paris, 6-7-8 juin 2002*, (Dossiers byzantins, 4), (Paris 2004), 87-101.

(客員研究員 東洋大学非常勤講師)